

令和5年度 学校経営報告（学校評価報告書）

四條畷市立四條畷南小学校

校長 杉本 政信

1 学校経営方針

子どもたちを取り巻く環境はめまぐるしく変化をしており、人生100年時代や超スマート社会（Society5.0）の実現に向けた人工知能（AI）やビッグデータの活用などに向けた、急速な社会システムの変革に対して、学校教育の果たしていく責任は日々増している。

これからの未来を生き抜く子どもたちに求められている力は、互いのもちあじ（多様性）を活かしながら様々な課題解決に向けてつながりを持って協働し、より良い社会を築いていこうと努力し続けることであると考えている。

そのような子どもたちを育てていくために、南小では、自分の将来に夢を持ち、しなやかにたくましく生きる力を育成していきたいと考える。四條畷市教育振興基本計画を基に、今年度の学校教育目標を以下のように設定した。

【学校教育目標】

「夢を持って自ら学び、たくましく生きる子ども」

～ つながり 安心安全 協働 家庭との連携 ～

今年度は、以下の視点について重点的に全ての教育活動の中で意識し取り組んでいく。

- ①子どもどうしの「つながり」を深めていく。子どもたちどうしが自分の考えや立場をはっきり伝えていくこと（非攻撃的自主主張）で、よりよく他者とつながっていくことができる事、自信をもって他者とつながる事を意識した活動を教育活動全般でおこなっていく。
- ②「安心安全」な学校・学級の環境づくりを全ての教育活動でおこなう。自分がここにおいて大丈夫であることや、自分を受け入れてくれる人がいることを大切にしていく。また全ての教育活動の中に、共生の視点や安心ルール、自分の心や体、命を守る学びの機会を保障していくことをおこなう。
- ③「協働」的な学びの場づくりを通して学力向上をはかる。仲間と様々な課題の解決に向けて学びあったり、学んだことを活用して相手にわかりやすく伝えたりする学習の場の設定をおこなっていく。
- ④「家庭との連携」を深めていく。子ども理解を深めるためには、家庭環境も含めた子どもの背景理解が不可欠であるし、保護者に対して学校での様子を丁寧に伝えていくことや理解・協力をあおいでいくことで、教育効果が上がっていくと考える。

2 めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）

★めざす学校像	確かな学びのある学校 安心安全で地域に信頼される学校
★めざす子ども像	夢を持って学ぶ子ども 自分も仲間も大切にできる子ども
★めざす教師像	子どもに生きる力をつけられる教師 子どもを理解し寄りそえる教師

3 学校の現状（よさと課題）

(1) 子どもたちの実態

本校児童は明るく素直で、友だちにも親切にやさしく接することができる児童が多い。知的好奇心も旺盛であり、楽しそうなことや新しい事に対して意欲的に取り組むことができる。子どもたちの根底にある自己肯定感・自己有用感の高さが上記の内容を下支えしていると感じている。しかし一方で、自分の考えや気持ちを丁寧に相手に伝える力や、自分の未来をイメージしながら夢に向かって努力する力、計画を立てる力や学習をふりかえる力の育成が課題である。

(2) 子どもたちを取り巻く環境

①教育環境

本校児童の家庭環境について、保護者は我が子に対する愛情や関心を持って子育てをおこなっている家庭が多い。家庭での教育環境については、子育てについての考え方が多様であることや、保護者の多忙さなどから校区内でも一様ではない（習い事に通う児童の数、家庭学習に保護者が関わる時間など）。

②地域

伝統的な地域のつながりを保ち、地域のおとなたちで子どもたちを見守り育てようとの意識をもっておられる地域の方は多い。学校安全協議会や民生委員、地域コーディネーターをはじめとして、子どもの安全確保やすこやかな育成のために熱心に力を貸してくださる方も多い。

③組織（教職員、PTA、保護者）

教職員は学校全体の課題や個々の児童の課題を共有しようとする意識を持っており、新しい取り組みへの共通理解も早い。児童への関わりを丁寧におこない、児童保護者との信頼関係を構築していく力を持っている。また教職員どうしのサポートや協力も相手意識を持ち行動している教職員が多い。

4 今年度の達成目標、具体的な方策

目標設定区分1 『学校経営』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
学力向上に学校組織をあげて取り組み、児童に主体的・対話的で深い学びを実現する。		下記「B 達成基準」参照	
B 目標実現に向けた取り組み			
項目	達成基準	結果	評価
基礎基本の学力を向上させる	NRT 偏差値 平均50以上	NRT 偏差値 平均 48.3	全体的には昨年度より1ポイント低下した結果となった。校内では国語・理科については校内授業研究や実践が計画的におこなわれていたが全学年で50ポイントを超える事はできていない。来年度は特に新5年生を中心に授業の中で言葉で表現する力の育成や、根拠を持って論述する力の育成に取り組む。
読書活動の充実	児童アンケート「家庭での読書時間」まったくしない 20%以下	アンケート結果 17.1%	昨年度より数値は少しだけ向上している。図書支援員による図書室の環境整備、蔵書の整理が行われ、教科活動や委員会活動を含めた取り組みにより本に親しみを持っている児童が増えてきていることがわかる。
学習内容の認知力の向上	児童アンケート「学習した内	結果再肯定 48%	学習内容の認知力の向上については、ふりかえりの充実のためにリフレクションシートを活用して自分が

	容について分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができる」最肯定60%以上		何を学んだのかをはっきりさせることを取り組んできた。肯定値全体では84.2%の児童が肯定的に回答できてはいる。来年度はさらに全ての授業でふりかえりの時間の充実をはかり、子どもの学びの定着に努めていく必要があると考える。
--	---	--	---

目標設定区分2 『学校組織の運営』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
主体的、対話的で深い学びを実現できるよう教職員の意識を高め、組織的な取り組みをおこなう		下記「B 達成基準」参照	
B 目標実現に向けた取り組み			
項目	達成基準	結果	評価
児童が課題解決に受けて話し合い、協働的な学びの場をつくり、自分の考えを「書いて」表現できる力をつける	①児童アンケート「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」肯定的回答80%以上 ②教職員アンケート「児童が課題解決に向けて話し合うなど、協働的な学びの設定に取り組んでいますか」最肯定50%	①結果 91.5% ②結果 31.3%	本校の研究テーマにそって、児童が意欲や相手を意識して教育活動を行うよう「知識技能を生きて働かせよう!～子どもが生き生きと活動する姿をめざして～」を校内研究テーマとして年間で行った。年間3回の研究授業をおこない教員全体で研究を深めた。伝える相手を意識した言語活動に取り組んだことにより数値の上昇がみられたと考える。今後もさらに取り組みを深化していくことが大事である。 教員の意識としてまだまだ自己目標に達していないと考える教員が多いことが伺える。また具体的な行動目標が示せていない事も要因ではないかと考える。より具体的にどのような学習の場が協働的な学びの場といえるのか教員全体で共有していく必要があると考える。
ICT活用の推進、校務支援システムを利用した働き方改革の推進	児童アンケート「ICTを使用することで、進んで学習するようになりましたか」肯定的回答90%	結果 79.3%	今年度、タブレットPCを授業や家庭学習（長期休業日を含む）で活用する事が全校的におこなえたことは成果である。日常的に児童がタブレットを活用する事で、主体的な学びやPC同士の協働的な学習活動もおこなえている。今後はさらに活用の頻度や内容の精選のをはかっていく必要があると考える。

目標設定区分3 『人の管理・育成』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
児童の自己肯定感・自己有用感を向上させ、自分を高めようとする意欲を育てるために、教職員の資質向上を図る。		下記「B 達成基準」参照	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
安心・安全な学級集団づくり	右記具体的方策に対応する児童アンケート項目：否定的回答が10%以下	①クラスの中に自分の気持ちを分かってくれる人がいる →結果5% ②クラスの人から認められることがある →結果10% ③みんなのためになることを見つけて行動している。 →結果5%	学校が子どもたちにとって安心・安全な場であることは教育活動の根幹であると考えます。その点において目標を達成できていることは、各学年の学級集団づくりが上手くいっていると考える。各学年に応じた自主活動の取組みやお互いの事をよりよく知る取組みが年間の中で継続的におこなわれたことが結果として表れていると感じています。今後もこれまでの取組みを大事にしながらよりお互いの事を正しく理解する学びの場をつくっていく必要がある。
不登校への対応	不登校ゼロ	30日以上不登校1名	結果として1名の長期欠席者を出してしまっている。しかしながら校内ケース会議を定期的に行い、当該児童の困り感について共有し解消に向けた具体的な取組みをチームとして対応できている。昨年度のものは解消し、今年度のものも少しずつ解消に向かって進んでいると感じています。
教職員の授業力向上	児童アンケート「理科の授業はわかりやすい」最肯定70%以上	結果 84.3%	担当者の授業改善の取組みによって理科の授業理解が全ての学年で高まっていることが分かった。学習内容を正しく理解させるための工夫（ワークシートの活用）が上手くいったと考える。他にも復習にAIドリルの活用などICTを上手く活用できたことも要因と考えられる。

目標設定区分4 『地域連携と渉外』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
地域コミュニティづくりの推進、家庭教育支援の充実		下記「B 達成基準」参照	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
家庭学習の習慣化	保護者アンケート「子どもは	結果 18%	家庭学習の習慣化のために様々な形態での宿題を出している事に対して、保護者の受け止めは一定肯

	宿題や自主学習にがんばって取り組んでいる」否定的回答10%以下		定的であると感じる。ただし、あまり思わない11%、まったく思わない7%の実態を受け止め、どのような形式での宿題が児童にとって好ましいものか研究をする必要があると感じる。
開かれた学校づくり	保護者アンケート「学校の教育活動は保護者によく知らされている」肯定的回答90%以上	結果 96%	昨年度よりさらに数値は向上している。学校だよりでは全学年の活動の様子が伝わるような工夫を行ってきた。学級だよりについても同様である。再肯定値についても48%まで向上している。さらに活動の様子を分かりやすく伝える努力をおこなう必要はある。

5 総合評価と次年度に向けて

今年度の南小学校の成果としてあげられることは、みなみっこの自尊感情は高い(自分にはよいところがある95%、将来の夢や目標がある85%、友だちに左右されずに自分で考え行動している95%)ことがある。その結果は教職員の不断の努力によって向上してきているがわかる(クラスの中に気持ちをわかってくれる人がいる95%、先生はあなたの良いところを認めてくれる95%) 日常の教育活動全般で子ども理解と子ども同士をつなぐ活動が行われたことで子どもたちが安心して学校生活を過ごせている。また保護者からの理解も昨年度より上昇し学校の様子が好意的に伝わっていることがわかる。

授業改革では授業改善加配を中心に授業づくりに全校で取り組むことができた。数年行っていなかった研究授業を年間3回おこない、低・中・高学年部会で授業案を練り上げた事、研究協議で授業内容を振り返り深めたことは全ての教員にとって深い学びの場になった事だと考える。今後も今年度同様の研究を継続していき、子どもたちが楽しく学べる協働的な学習の場を創造していく必要がある。

今年度初めて取り組んだ1年生のサポートをおこなう「エプロン先生」は、元学校評議員の助けもあり、スムーズ実施することができた。教員との関係も良好で来年度はさらに拡充した活動をおこなっていただける予定である。また、民生委員さんとの交流で様々な教育活動へ関わっていただく教育ボランティアの流れもつくってこられた。来年度はさらに地域の教育力を教育活動に参画してもらい、子どもたちの健やかな成長にいかしてもらう。

来年度も教育目標をさらに進めていけるよう「めざす子ども像」や「望ましい子どもの具体的な姿」を教員と共有しながら、保護者・地域に理解され協力してもらえる学校づくりをすすめていきたい。